

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

## 第11回 BOZAK

1950年頃に米国の東海岸にあるコネチカットに設立された音響の研究会社で、創立者のルーディー・ボザーク氏は当時 McIntosh のスピーカーの設計に携わりその原型を作った事で有名。その後自社ブランドBOZAKを立ち上げて、音楽性とデザイン性に富んだ大小様々なスピーカーを生産していた。ユニットは振動板を独自に開発した3つの高中低域用ユニットに大型のアルニコマグネットを搭載させたもので、再生音も陰影に富んだ音の中にメリハリのある中高音と重圧でスケールに富んだ低音が魅力的な東海岸のインテリジェンスを感じる音の世界を表現してくれる。日本では1974年頃からデザインを一新したムーリッシュモデルが日本コロンビアにより輸入が開始されたが、この頃はマグネットは全てフェライトに変更されており、その後のBOZAKの渋い音、もたついた音という評価の要因となったのかもしれない。

本文 / 田中伊佐資  
キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)  
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

## B-4000 シンフォニー No.1

1954年頃に開発されたモデルで、上位機種 のB310 コンサートグラウンドより一回り小さいモデルだが、B199Aウーファー×2個、B209ミッドレンジ×1個、B200Xトウイーター×3個の豪華なユニット構成となっている。トウイーターを複数アレイ状に配置する事によって音場空間の拡大と中低域ユニットとの音のつながりを向上させている。とても重心が低くハイスピードな低音と滑らかな中高域音が濃密に絡み合うサウンドは良く知られる他のヴィンテージスピーカーとは別格な音の世界があり、特に名前通りにクラシックのシンフォニーの再生音は一聴の価値がある。市場価格95万円前後/ペア



## B-302A FRENCH PROVANCIAL

フレンチプロヴァンシャルと名付けられていて1958年頃に開発された、優雅な南仏スタイルのデザインが豪華な雰囲気を出している。職人のハンドメイドで仕上げられた箱に、B199Aウーファー×1、B209ミッドレンジ×1、B200Xトウイーター×2の構成で比較的コンパクトなキャビネットだが、申し分のないくらい重圧でハイスピードなサウンドが奏り出され、クラシックはもちろん JAZZ、ROCK、ボーカル系サウンドにも十分対応してくれる。市場価格65万円前後/ペア



## B-302A ITALIAN GOSICH

イタリアンゴシックと名付けられており1961年頃に開発されました、イタリアの歴史あるゴシック建築をモチーフにデザインされている。フレンチプロヴァンシャルのデザイン違いでユニット構成も全く同じ3ウェイとなっています。こちらも職人の丁寧なハンドメイドで作られた美術品のような箱から、想像を遥かに上回る音の世界が繰り出される。こちらも前記モデル同様に日本への正式に輸入はなかった。市場価格60万円前後/ペア

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

# BOZAK

含みのある渋さに歯切れが加わるクラシックが、ひとかたならずいい

「きょうはボザークでいきます」。アトリエJe-tee代表の岡田圭司さんが発表した。ウソのようだが店の扉を開けたところで、このようにして今号のテーマを僕は知る。事前に聞けばもちろん教えてくれるが、パソコンでついつい検索などをしてしまい、偏った先入観で臨んでしまうことになる。いつもまっさらからスタートがいい。ただボザークと聞いた瞬間に、「これクラシック向きだよなあ」とそれ系に疎い僕はかすかに気落ちした。聴いたことがないながらも、ボザークはなんとなくそういうイメージなのだ。幼稚な発想ながら、ドボルザークと名前が似ているせいか。

実際、その日2機種聴くうちの小振りなD-1302イタリアンゴシックは、モーツアルトの交響曲第38番からスタートした。いつもキング・コールからスタートするのにならぬ。岡田さんもクラシック向きとみているのだろうか。次がピアノ・ソナタ、その次はロッシニのチェロ・ソナタ。「ヴィンテージでもオールマイティにいける」を標榜する岡田さんにしては異例のクラシック3連発だ。そういう場合、嫌がらせのように「そろそろマドソンでガンといきましょう」と言える間柄なのだが、僕はずっと黙っていた。なぜか。クラシックが、ひとかたならずいいのだ。

とえばクラシック・ファンに好かれるタノイのような含みのある渋さに近い。だが、もつとかつちりと歯切れがある。そしていかにもアメリカ東海岸を思わせる重みというか手応えがある音だ。岡田さんは「密閉型でキャビネットは頑健に作られています」と途中で説明してくれた。これまでバスレフ型やホンロードをかけたもの、平面バッフルのようなタイプを聴いてきただけに、肌合の異なる音の凝縮感を覚えないわけにはいかない。またヴォーカルものも絶唱だ。泰然としたシナトラのパラードには心打たれた。

次はウーファーがダブルになって、トウイーターも8個というD-4000シンフォニーNo.1。はなから「シンフォニー」と銘打っている。この結果はお察しの通りというしかない。トリとなるシンフォニーの前に、多分初登場となるミッドレンジが歌い出した。僕は残り全部クラシックでいいと思っていたくらいだが、こういうせつせつとした絶唱ヴォーカルはヴィンテージ・スピーカーが無敵。かろうとした西海岸とはまた違った魅力がある。D-1302と雰囲気、質感はほぼ同じで、当たり前だけどスケールアップが著しい。そしてモーツアルトの交響曲だ。ブワッと前と後ろに広がる。さほどクラシック好きでもない僕がずっと聴いていたと思う。隠れた名品をまた知ってしまった。

**B209**  
メタル素材とゴム系樹脂をラミネートした特殊な製法で形成されたコーン紙を持つユニットで、400Hzから2,500Hzの帯域を受け持たされた3ウェイシステムに1個または2個搭載されている。口径16cmのスクーナーながらフルレンジでも使えるくらい優れた特性を備えている



**B199A**  
紙に特殊な素材を混合させた素材で作られた厚みのある固い振動板を強力なアルニコマグネットが駆動させる30cmウーファー。エッジは固い布製のギャザードタイプになっているため、ハイスピードな低音再生を可能にしている。また、ボイスコイルの口径がかなり小さいため、高域特性も良くB200Xトウイーターとの2ウェイ構成としても使用できるほど



**N10102**  
大型のオイルコンデンサーとコイルを6dB/octで接続された3ウェイ専用のネットワークでクロスオーバーは400Hz / 2,500Hzに設定されています。トウイーターがコーン型という事で通常よりも下の帯域まで受け持っており、その分スクーナーには2オクターブほどの帯域だけを受け持たせて全体としてなだらかな特性の再生音を完成させているようだ



**B207A**  
B199AウーファーとB200Xトウイーターを15インチサイズのアルミダイキャストフレームにマウントして同軸2ウェイユニットを形成している。ネットワークは介さず2個直列に接続されたトウイーターを4μのコンデンサーでローカットしてウーファーとパラレル接続されている。1970年代以前のB-300系のシステムにはこのユニットが搭載されている



**B200X**  
紙と薄いアルミニウムのラミネートコーンで形成された7.5cm口径の振動板を大きなアルニコマグネットが駆動させている。2,500Hz以上の帯域を受け持ち、システムによって2個〜8個搭載されている。複数個のトウイーターをアレイ状に配置する設計はその後のMcIntoshスピーカーシステムにも採用されることとなった